

養護教諭が関わる登校のための本人・保護者・学級への支援

— 家庭訪問や面談、SST での介入を通して —

学校力開発分野 (22822813) 工藤 由美衣

本研究では、養護教諭が不登校児童への個別支援、保護者への支援、及び学級への介入を行い、登校への支援の有効性を検証することを目的とする。「個別支援」としては家庭訪問・SST・不登校予防及び登校プログラム、「保護者支援」としては家庭訪問、「学級支援」としては朝の会の保健指導や SST を実施した。その結果、対象児の登校日数や滞在時間の増加が見られ、養護教諭が関わる登校支援が有効であることが示唆された。

[キーワード] 不登校, 小学校, 養護教諭, 家庭訪問, ソーシャルスキルトレーニング

1 問題と目的

(1) 不登校の現状と課題

令和 4 年度日本全国の小・中学校における不登校の児童生徒数は 29 万 9048 人であり、過去最多を更新したと報告されている(文部科学省, 2023a)。不登校の児童生徒数は年々増加傾向にあり、喫緊の課題である。

文部科学省(2022)は不登校について、「何らかの心理的、情緒的、身体的あるいは社会的要因・背景により、登校しない、あるいはしたくともできない状況にあるため年間 30 日以上欠席した者のうち、病気や経済的な理由による者を除いたもの」と定義している。

文部科学省(2023a)は、不登校の要因を「学校に係る状況」「家庭に係る状況」「本人に係る状況」と「該当なし」で集計している。「本人に係る状況」では、「無気力、不安」「生活リズムの乱れ、あそび、非行」が上位であり、次いで「家庭に係る状況」では「親子の関わり方」、さらに「いじめを除く友人関係をめぐる問題」の順で多くなっている。

(2) 不登校児への養護教諭の支援

文部科学省(2022)は「不登校に限らず、学校の中での課題に対応するためには、まずは、教職員一人一人が児童生徒に対する共通理解の姿勢を持ち、学校全体でチームとしての指導・援助を行う体制の充実を図ることが肝要」と示している。中でも養護教諭については、心身両面から児童生徒の健康に関わり、不登校のケースに関わる機会の多さから、重要な役割を担うとしている。

養護教諭は、学校職員の一員として、担任のサポートや関係機関を繋ぐ役割を担っていることが

多い。不登校の児童への対応や支援について、学校全体での取り組みや担任が核となった支援の在り方については数多くの実践が行われ、論文等も数多く挙げられている。一方で、小学校での養護教諭が核となった不登校児童へ登校支援の研究は、安福ら(2009)に見られるものの数少ない。

養護教諭の不登校児童生徒に関わる取り組みについて、熊谷(2021)は「養護教諭は多くの学校で 1 人の配置であるために、仕事や役割が多く、また、不登校児童生徒に対する養護教諭の役割が明確になっていない」ことを問題としている。そこから、「不登校児童生徒に対する養護教諭の直接的・間接的はたらきかけが十分発揮できていないこと」を明らかにし、「不登校児童生徒に対して養護教諭がどこまで関わるのか、保健室登校はよいのか」といった問題を挙げ、不登校の児童生徒への直接的・間接的な手立てを講じているものの、どの程度の関わりを持ったらよいのか判断が難しいことを課題として挙げている。

また、文部科学省(2023b)は養護教諭が持つ強みとして、「心身の健康課題の有無にかかわらず、学校生活に何らかの不安を抱く児童生徒等に対して、学級担任等とは異なる視点から相談に乗ることで、健康課題や不安の解決に向けた糸口の発見につながる」と述べている。不登校の要因として上位を占める「無気力、不安」に対し、そうした強みを持つ養護教諭が関わり、支援をしていくことが有効なのではないか。

(3) 学校と家庭、学級との連携について

不登校の要因からもわかるように、生活リズムの乱れなど、不登校改善のためには、家庭と学校

の連携が不可欠である。さらに、不登校の児童生徒を抱える保護者は、自分が不登校にさせてしまったのではないかと自分を責めたり、孤立したりすることもある。そのような状況は児童生徒に良くない影響を与えることが想定されることから、保護者を含む家庭への支援が必要である。

また、学校内においては、学級への支援を行い、環境調整を行うことで、不登校児が円滑に在籍学級へ復帰することにつながると考える。以上のように、本人を中心に、学校においては学級との関わり、家庭においては保護者との関わりをそれぞれ意識したコーディネートを行い、支援していくことが重要であり、養護教諭の職務特性を踏まえると、効果的な働きかけが可能であると言える。

そこで本研究では、不登校児童への支援、家庭や保護者との連携や支援及び不登校改善後の適応を目指した環境調整のための学級支援を養護教諭が行い、その有効性を明らかにすることを目的とする。

2 方法

(1) 対象

A 市立 B 小学校 6 年生で、前年度 47 日間欠席の不登校の児童を個別支援対象児とした。

なお、対象児が在籍する学級を対象学級とし支援を行う。

① 対象児の実態

a. 心理検査の結果より

対象児へ心理検査 KABC-II の実施を行った。その結果、「継次処理<同時処理」の認知特性があることが分かった。同時処理が大いに優位であり、視覚情報から情報の統合を得意とする(表 1)。

b. 支援以前の対象児の状況

5 年生で不登校に該当する児童である(表 1)。対象児自身のこだわりやそれに関わる集団指導への適応の難しさ、学習及び対人関係での対象児自身の困り感、自己肯定感の低下など、様々な理由が重なり、不登校となったと考えられる。対象児は、これまで通り中学校通常学級への進学を希望している。そのため、対象児への対人スキルを中心とした場面に応じたソーシャルスキルトレーニング(以下、SST)や登校に向けた個別的な支援を行うこととする。

② 保護者の実態

学校への不信感があり、対象児が不登校になった際に、学校からの介入に抵抗感を示していた。また、子育ての悩みを有しており、保護者自身の様々な葛藤する姿が見られた。

表 1 個別の教育支援計画(不登校改善計画書)

氏名	■■■■	性別	男	生年月日	20YY 年〇月×日	期間	20XX 年 4 月～20XX+1 年 3 月
診断・判断名	「自閉症スペクトラムの疑い」「学習症(書き)の疑い」「不登校傾向(別室登校)」(山形大学 特別支援教育臨床科学研究所)						
実態・課題	・ 5 年生：欠席 47 日(病欠・事欠) で、不登校該当						
検査・成績等	・ KABC-II 【認知：■■(継:87 同:130 計:■■ 学:■■) 習得：■■(語:■■ 読:■■ 書:■■ 算:■■)】						
支援体制 合理的配慮	<ul style="list-style-type: none"> ・ 学校登校への適応期間の設定。(11 月, 12 月) ・ 学級への登校のため、学級への環境調整を行う。 ・ 保健室登校をした際には、養護教諭もしくは対象児が会える教職員が対応、学習指導を行う。 ・ 週 2 回の家庭訪問を行い、状況の確認及び支援を行う。(定例日, 定時) 						
長期目標 (20XX 年 3 月) 卒業時	本人・保護者	<ul style="list-style-type: none"> ・ 社会的な自立してほしい。 ・ 中学校, 通常学級への進学, 登校したい。 ・ 対人スキルを身に着けたい。 ・ 級友とともに卒業証書授与式へ出席したい。 					
	学校・学級	<ul style="list-style-type: none"> ・ 5 月から 10 月：月曜日に学校へ登校する。 ・ 11 月から 12 月：登校プログラム「進化プラン」で心身が登校へ適応できるようになる。終業式への参加。 ・ 1 月から 3 月：学校へ登校し、学習することができる。 ・ 対象児が学級へ戻った際の円滑な受け入れができる。 					
関係機関	時期	関係者の役割と具体的な支援					
学校	随時 登校時	<ul style="list-style-type: none"> ○担任 ・ 配布物や ICT による学習教材の提供。 ・ 学級への参加を促す。 					
	登校時	<ul style="list-style-type: none"> ○教頭 ・ 登校時の学習指導。 					
	随時	<ul style="list-style-type: none"> ○養護教諭(特別支援コーディネーター) ・ 週 2 回の家庭訪問を行う。(定例日, 定時) 					
	登校時	<ul style="list-style-type: none"> ・ 保健室での学習計画を本人に作成させる。学校滞在時間を長くするよう促す。学級への参加を促す。 ・ 関係機関との連携。校内支援体制の調整。 					
フリースクール	4 月から 12 月	<ul style="list-style-type: none"> ・ 火曜日から金曜日の間, 日中通う。 ・ ゲームや漫画, 公園で遊ぶ。金曜日は, 昼食をみんなで作る。 					
家庭		<ul style="list-style-type: none"> ○保護者 ・ 本人に, 大学でのトレーニングを勧める。 					
医療		○なし					
専門家チーム 教育委員会	受諾時	<ul style="list-style-type: none"> ○山形大学 三浦光哉教授 ・ 本人がトレーニングの受諾時, 面談および個別指導への指示を行う。 					

③対象学級の実態

入学時から単学級であり、クラス替えがなく、児童同士の関係性が固定化しやすい環境である。一方、主な進学先は 5 つの小学校が集まる大規模中学校で、大きな集団に入る。そのため、中学校進学時に対人関係で困難を抱えることが危惧される。対象学級の児童全員へ行った「中学校へ向けたアンケート」の結果からも、人間関係への不安を抱える児童が一番多かった。さらに、対象児が登校を継続し、学級へスムーズに適応することが大きな課題である。そこで、中学進学へ向けた準備及び対象児の円滑な適応及び受け入れを行うことを目的にし、学級への支援を行っていく。

(2) 期間

20XX 年 4 月から 20XX+1 年 1 月までの約 10 か月間とした。

(3) 手続き

実践をするにあたり、「本人」「保護者」「学級」との関係構築しつつ、支援を行う。

①対象児への支援

個別の教育支援計画(表 1)をもとに不登校改善のための取組みを行う。

a. 週 2 回の家庭訪問

三浦(2014)は、決まった時間に家庭訪問を行うことで、不登校児童が、教員が家に尋ねてくることへの心の準備ができるとしている。そこで、毎週月曜日と金曜日の決まった時間に 1 時間から 2 時間程度の家庭訪問を実施する(家庭訪問の時間の設定については、保護者との相談の上、教員の勤務時間内で実施した)。家庭訪問は、対象児と養護教諭との信頼関係の構築とともに、決まった時間に実施することで、家庭訪問の習慣化を図る。各訪問ではその目的を明確にし、実施する。

b. 大学での指導

休日を使って SST を実施する。月 2 回程度の頻度で行い、あわせて、専門家(大学教員)と対象児のみ、もしくは保護者を含めた面談も実施する。

c. 登校支援

文部科学省(2022)は、不登校支援において「学校に登校するという結果のみを目標とするのではなく、児童生徒が自らの進路を主体的に捉え、社会的自立を目指せるように支援を行うこと」が求められると述べている。それを参考に、本実践は対象児と登校についての目標を中学校への登校や社会的な自立に向けた取組みとして捉え、実践し

ていくこととする。具体的な手立てとしては、以下の i から v の項目を実施する。

i. 出欠確認

三浦(2014)は、長期の欠席によって、出欠連絡の滞りや連絡無しでの休みが起り、学校との繋がりが希薄になることを指摘している。そこで、ICT(ロイロノート)を活用し、毎朝の健康観察及び出欠確認を実施する。また、対象児自身が送信する様式と、保護者が送信する様式を設定し、養護教諭が正確な出欠状況把握を行う。

ii. 滞在時間カード

三浦(2014)は「滞在時間を前日より長くしていくことが肝要」と述べている。そのことを踏まえ、対象児の認知特性に配慮した視覚的に確認することができるカードとストップウォッチを用いて自分で滞在時間を把握できるよう支援する。カード記入後は学校長に押印してもらい、登校した達成感を味わうことができるようにする。また、滞在時間が表示されたストップウォッチを写真で撮影し、画像にコメントを加え、ICT を活用し児童へ送信することも行う。

iii. 不登校予防

三浦(2014)では、欠席が続くと欠席日数の確認が滞ることを指摘している。対象児にもその傾向が見られた。そこで、欠席日数を本人が把握し、不登校該当の 30 日を超えないように意識づけるための「有休カード(図 1)」を使い、自分で休む日の決定と理由の記入を行うようにする。また、欠席についても出席カード同様に、学校長による押印での認定を行う。

名前		名前	
曜日	日付	曜日	日付
29	4月10日	14	
28	4月13日	13	
27	4月17日	12	
26	4月24日	11	
25	4月28日	10	
24	5月1日	9	
23	5月8日	8	
22		7	
21		6	
20		5	
19		4	
18		3	
17		2	
16		1	
15			

図 1 欠席日数確認のための有休カード

iv. 登校プログラム

対象児が 3 学期(1 月)より学級への登校を目指したいという思いを持っていたため、対象児と面

談を行い、6週間かけて学校滞在時間を延ばし、徐々に心身を登校に適応させていくこととする。また、対象児と相談の上、このプログラムを「進化プラン」と呼び、360分を最大滞在目標時間とした。さらに、各週に目標や挑戦するテーマを設定し、取り組む。各週の目標時間は表2のように設定し、1日10分ずつ滞在時間を増やし、休んでいた体を学校滞在に耐えうるために、心身を適応することを大きな目標とする。

表2 進化プランの時間目標

週数	目標滞在時間
1週目	20～60分
2週目	80～120分
3週目	140～180分
4週目	200～240分
5週目	260～300分
6週目	320～360分

v. 保健室登校のスケジュール作成

三浦(2014)は「別室でのスケジュール作成」を活用し、本人が過ごし方を計画する方法を挙げており、それを参考に、対象児の認知特性に合わせ、対象児の視覚的支援及び見通しをもつために、その日や週をかけてやることを「やれることリスト」としてあらかじめ記載しておく。対象児がそのリストから自ら選び、組み合わせ、その日の学習計画を自分で決定し取り組むようにする(図2)。

「保健室」における1日の学習計画

令和 年 月 日 ()		名前	
【週目標: 身体を慣らすこと】		【登校時刻: 時 分】	
時間	校時	教科書・学習書	学習内容
8:15～8:45	朝活動		
8:45～9:15	1		
9:15～9:45	2		
9:45～10:30	3		
10:30～10:55	中間休み		
10:55～11:25	4		
11:25～11:55	5		
11:55～12:25	給食		
12:25～12:55	6		
12:55～13:25	7		
13:25～13:55	8		
13:55～14:25	9		
14:25～14:55	10		
○本人の感想		予定下校時刻: 時 分	
○保護者からのコメント			
【やれることリスト】			

図2 保健室でのスケジュール作成

活動の候補の中に、様々な教職員と関わる内容も入れておくことで、対象児が自分で選択できるようにする。

②保護者への支援

対象児への週2回の家庭訪問を行った際に、対象児と関わる時間とは別に、保護者との時間を作る。協働支援者として支援計画の共有や対象児の成長のフィードバックを行い、信頼関係の形成及び教育相談を行う。

③学級支援

朝の会での学級支援(週3回)を行う。SSTや構成的グループエンカウンター(以下、SGE)、保健指導の内容を朝の会の15分程度、月・水・金曜日で実施する。対象学級へ事前に実施したアンケートで、人間関係の形成について練習の必要性を自分たちで感じていることが分かった。そこで、対象児の受け入れを円滑に進めるとともに、中学校進学へ向けた準備を目標に、学級に対して、対象児が戻った際の受容的環境調整に取り組むこととした。

養護教諭は経年的に児童と関わりをもち、学級への支援がしやすい。その立場で、固定化した関係性の再構築や対人スキル育成の効果を目的に、支援を行う。さらに対象の学級担任と相談し、対象児と対象学級双方の状況を把握している養護教諭が主体となって実施することとした。また、SGEを定期的実施し、曾山(2023)によって有効性が検証された「スリンプル・プログラム」と、保健指導を組み合わせ実施する(表3)。

表3 学級への支援計画

月	テーマ	詳細
5	ガイダンス	<ul style="list-style-type: none"> ・中学校へ向けた準備として、朝の時間や授業で関わる事の説明。 ・プリファレンスチェック ・将来の夢について確認(どんな中学生になりたい?) ・学級目標の具体化
6	健康な体を作ろう	<ul style="list-style-type: none"> ・身体の変化について(4年生の学習の復習) ・睡眠についての話 ・運動についての話 ・食事についての話
7	聴く・話す【伝え方】	<ul style="list-style-type: none"> ・友達の話聞いてみよう ・規則正しい生活リズムについて
8	リフレーミング【自己理解】	<ul style="list-style-type: none"> ・学級目標の具体化(再設定) ・自分の良い所 ・周りから見た自分の良い所
9	聴く・話す【伝え方】	<ul style="list-style-type: none"> ・グループでの話し方を学ぼう ・体の不思議
10	心の健康	<ul style="list-style-type: none"> ・アンガーマネジメント
11	人間関係形成	<ul style="list-style-type: none"> ・話しの仕方を練習しよう ・感染症に負けないからだ
12	気持ちの表現	<ul style="list-style-type: none"> ・自分の良い所 ・周りから見た自分の良い所 ・寒い時期の身体の健康

(4)倫理的配慮

本論文における執筆と掲載について、その意図や公開される範囲など、対象児及びその保護者へ事前に説明を行った上で、口頭と書面にて了承を得た。

3 結果

(1) 対象児の変容について

① 週 2 回の家庭訪問について

家庭訪問は、感染症などの影響もあり、対面と Zoom のオンラインで合わせて 62 回実施した。初期は対象児の趣味や好きなアニメやゲームの話をし、関係を築くことを意識した。関係性の構築に伴い、定期健康診断への出席等、登校や級友を話題にした会話、決定を要する内容や対象児自身のスケジュール確認ができるようになった。

② 大学での指導について

合計 10 回(検査含む)の実施となった。指導内容は、本人の認知特性へのアプローチを目的とした内容や場面ごとの SST 及び自己認知のための支援として、自分の良い所探しや成長した点のフィードバックを重点的に行った。その結果、最初は自分の良い所を見つけられず、自信のない様子が伺われたが、支援を通して徐々に自分の良い所を 5 つ以上探し、振り返りカードに記入できるようになった。

③ 登校支援について

a. 出欠確認について

ICT(ロイロノート)を活用し、出欠意志を対象児自身が提出した。提出時刻は生活リズムが安定するまでの期間や長期休み明けに滞る傾向が見られたが、登校の継続で、登校前などの一定の時間内で提出が続くようになった。

b. 滞在時間カード(登校頑張りカード)

学校滞在時間をストップウォッチで計測し、時間を撮影し、対象児へ ICT を通して写真を送った。

図 3 可視化した滞在時間カード

その後、カード(図 3)に自分で記入し、滞在時間が延びると「自己ベスト更新」や「ミッションクリア」と記入する様子が見られた。

c. 有休カードの実施について

対象児へ不登校の定義を説明し、30 日を超えないために行うよう説明した上で実施した。自分でカード(図 4)を使い、残りの休みを確かめながら、記入や出欠の選択を行っていた。

図 4 有休カード記入状況

d. 登校プログラムの実施について

11 月より、登校支援プログラム「進化プラン」を実施した。それに伴う登校日数の割合についての推移及び登校した際の学校滞在時間について図 5 のような変化が見られた。

e. 出席の割合及び登校時の平均滞在時間の推移

支援を始めた 20XX 年 4 月から 20XX+1 年 1 月の期間の各月における出席割合の変化を図 5 に示す。支援前の 1 月下旬から 4 月は登校が全くなかった。本格的に支援を開始した 5 月から徐々に登校日数は増加したが、夏季の長期休暇を経て、減少した。また、10 月は支援者が 1 か月不在になり、登校日数が減った。その後、登校プログラム「進化プラン」を始めた 11 月は登校できる日数が増加した。1 月は、体調不良で 1 日欠席したため、登校の割合が 12 月と比較して、減少した。

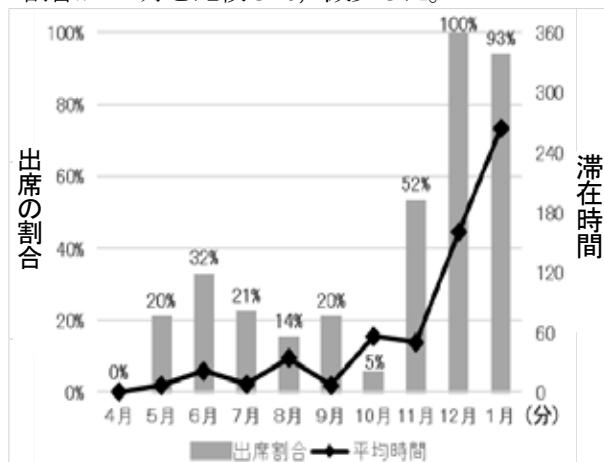


図 5 対象児の登校状況の推移

学校滞在時間の推移について、最大目標時間の設定を通常登校の滞在時間に合わせて 360 分程度

と想定し、月毎の平均時間の推移を表した(図5)。

4月は欠席が続き、滞在時間が全くなかったが、5月からは、定期健康診断等のため滞在時間が徐々に増えた。しかし、長期休みの後は調子が整わず、滞在時間はやや減少する傾向が見られた。

5月は7分程度の学校滞在だったのが、登校プログラム実施後の11月以降は、平均2時間以上となり、増加した。

朝の登校時刻については、登校支援プログラムの「進化プラン」以前は9時や11時以降など大きくばらつきが見られたが、「進化プラン」後にはほとんどの日で朝9時に登校していた。さらに、1月には、朝8時30分に登校することが多かった。

f. 保健室登校のスケジュール作成

対象児が、保健室へ登校するようになった際、保健室における1日の学習計画の図2を活用し実施した。保健室での過ごし方に「やれることリスト」を入れ、本人が選択して、1日の学習計画をスムーズに立てることができた(図6)。

「保健室」における1日の学習計画
 令和 年 月 日() 名前
 【週目標:職員玄関から登校しよう】 登校時刻: 16時40分 今日のmission: 237分

時間	校種	教科系・学習室	学習内容	学習場所	担当	チェック
8:15-8:30	離席					
8:30-9:40	1					
9:40-10:30	2					
10:30-11:15	中間休み					
11:15-11:45	3	学習	プリント	保		
11:45-12:30	4	学習	プリント	保	妙	
12:30-12:45	離席					
12:45-1:30	登校					
1:30-2:00	5	学習	プリント	保	妙	

本人の感想
 お母さんにプリントを渡すのがとても嬉しかった。先生に話しかけた。お母さんに話しかけた。お母さんに話しかけた。

担当者のコメント
 お母さん、よく頑張ってますね。先生に話しかけた。お母さんに話しかけた。

【やれることリスト】
 動画の視聴 止教室クロスワード 録音感想コメント ナップザック作り
 夏休みの宿題(算数・理科) 保健プリント 読書
 プレゼント作り お手紙書き 生活記録書き
 いつもありがとの会

図6 保健室における1日の学習計画

学校行事なども、最初は全く関心を持たず、あることも知らない状態であったが、11月の登校支援プログラム「進化プラン」後は、授業参観も校内の動きと同様に、保健室で取り組むことができるようになった。また、登校に心身が慣れると1日1コマ以上は教室で学習するようになった。

一方で、学習内容の選択に関しては、図画工作や家庭科を好んで選択していた。書写にも取り組んでいたが、主要教科の国語科や算数科などの教科学習を「やれることリスト」に挙げていても全

く選択しなかった。

g. 支援を通しての活動や行動の変化

支援開始時、対象児は大学での個別指導をはじめとする外部へ関わることを拒否する傾向が強かった。一方で、養護教諭への拒否反応は支援の初期はほとんどなく、自分の気持ちや考えを話せる程度 of 関係を築くことができた。

5月頃、定期健康診断に出席すると決めて以降、徐々に学校に関する話題を自ら話すようになり、困り感も話すようになった。その理由を対象児は「そういったことを話した方が、養護教諭も支援しやすいかなって」と述べており、対象児なりにSOSを出す様子が見られた。6月頃になると、環境の変化への拒否感が強まり、一時的に会うことに拒否感を示す言動があったものの、すぐにそのような言動はなくなり支援を受け入れていた状態に戻り、その後は大きな拒否反応は見られなかった。

11月の「進化プラン」で登校が続くようになると、中学校の説明会への参加や授業参観への取り組みなど活発に活動へ参加するようになった。また、保健室における学習が定着すると、校長・教頭をはじめとする様々な教職員と保健室で会えるようになった。その後、教職員と会う時間が延び、図書室など保健室以外に自ら訪問する様子が見られた。さらに、給食を運んでくれた級友に会うことができるようになり、休み時間に遊ぶことや学級活動に参加することができるようになった。

(2) 保護者の変容

支援初期は、学校への不信感から支援に対しても消極的であった。しかし、対象児と養護教諭の関わりを間近で見ている、徐々に保護者自身が支援を受け入れる様子へ変化していった。保護者自身も対象児が不登校になったということへのネガティブな側面へ目を向けていたが、養護教諭が児童の変化について、肯定的なフィードバックをすることで、成長している側面へ目を向け、一緒に喜ぶようなポジティブな発言や関わりが増えるようになった。また、当初は登校へ消極的だったが、対象児本人の希望もあり、「進化プラン」で対象児が登校や学校での活動に一生懸命取り組んでいる様子を見て、登校のための関わりや学校での学習の必要性を感じるように変化していった。さらに、過去の対象児へ行った健康相談や定期的に発行している保健だよりを通して、保護者が支援者に対して、好意的な印象をもっていたことが定期的な

面談を通して分かった。

(3) 学級の変容

河村(2007)の「よりよい学校生活と友達づくりのためのアンケート hyper-QU」(以下、Q-U)図書文化社の結果を基に見ていく。

表 4 学級満足尺度 4 群出現率の推移^(A)

	1 回目 20XX. 5	2 回目 20XX. 12
満足群	83%(10)	92%(11)
非承認群	8%(1)	0%(0)
侵害行為認知群	0%(0)	0%(0)
不満足群	8%(1)	8%(1)

Q-U の結果から、対象の学級における「非承認群」であった児童が「満足群」へ移行した(表 4)。また、ソーシャルスキルにおいては「配慮のスキル」の得点が 30.8 から 31.3 に、「かかわりのスキル」は 29.4 から 29.9 に変化し、それぞれ 0.5 ポイントの増加が見られ、ソーシャルスキルの向上が見られた。対象児は不満足群該当で変化がないものの、「承認得点」「被侵害得点」での改善が見られ、学級への認識への変化があった。

また、対象児用の給食を運搬する際に、対象児は級友と会えるようになった。その際には「元気?」「昼休み一緒に遊ぶ?」など対象児の様子に合わせて、声をかけている姿が見られた。中学校説明会に参加した際には、級友が対象児と自然に会話を交わし、一緒に活動していた。

4 考察

(1) 対象児への支援について

三浦(2014)は、家庭訪問について訪問の時間設定を「一定の日時を決めて実施する」とし、そうすることで本人が「待つ心づもりができる」としている。定期的な家庭訪問を行ったことで、対象児の心づもりができ、ゲームやメディア機器に触れる時間から、話す時間へと場面の切り替えにも意識が向くようになったと考える。

大学での指導では、心理検査を用い、対象児の認知特性を明らかにしたことで、本人が自分の苦手な部分を客観的に知るきっかけになり、困り感を話せることに繋がったと考える。また、自分の考えを表現するような支援が、自分を俯瞰する発言の増加や自己認知及び自己理解が促進される機会となったためと考える。

登校支援に関わって、本人の意思を確認するような手立てを意識的に増やし、視覚的な支援を複数組み合わせを行った。その結果、徐々に登校日数及び登校時間が増加した。しかし、長期休み後、10 月は登校が著しく減少しており、その月は養護教諭が 1 か月間不在にしていたこともあり、支援者の不在が登校への不安感に影響を与えた可能性がある。一方で、会える職員の増加、図書室などへの滞在ができるなど、行動範囲が広がった。保健室と養護教諭の存在が合わせて、安全基地としての役割を果たし活動拠点となったことで、対象児が安心して別教室への移動が可能になったと考える。また、登校の継続でリズムができ、滞在時間も延び、朝の登校時間も一定になった。朝の登校が可能になったという変化により、対象児の心身が登校へ適応するものになったと評価できよう。

文部科学省(2022)では、不登校の児童生徒が「支援する周りの大人との信頼関係を構築していく過程が社会性や人間性の伸長につながり、結果として、社会的自立につながる」ことを挙げている。対象児に見られた変容は、家庭訪問や大学での支援などを通し、信頼関係構築の過程で、対象児自身が自立することへつながったためと考える。養護教諭が家庭訪問をはじめとした支援を行うことで、児童が養護教諭と安心して関わることができたため、保健室へ登校する環境変化を受け止めやすくなり、結果的に心の準備をして安心して登校することへ繋がったと考えられる。

(2) 保護者への支援について

文部科学省(2022)は不登校の子供を持つ保護者は、子育ての悩みを有し、子供の将来について不安を抱える事が少なくないとし、そうした保護者との信頼関係を築き、丁寧な個別面談での保護者の支援が子供の好ましい変化につながる可能性を挙げている。今回、養護教諭が普段行っている救急処置や健康相談などが、円滑な信頼関係を築く土台となり、さらに、家庭訪問で、保護者との関係が深まったことが、より円滑な支援を行うために効果的であったと考える。

(3) 学級への支援について

級友の対象児への関わり方にも受容的な様子が多く見られた。対象児は級友との関わりから、安心感を持ち、学級への認識が改善したと考える。また、Q-U の結果から、学級満足度の改善が見られた。対象児のための環境整備としての SST・SGE

が学級内における対象児以外の児童の満足度にも影響する波及効果が見られた。

(4) 本研究の成果

一連の支援の結果、対象児には「進学に向けて自ら目標を決め、取り組む姿」「自分の良い部分にも目を向ける姿」「支援者へ対象児なりのSOSを出す姿」が見られるようになった。文部科学省(2022)は不登校支援の第一歩を『将来の社会的自立に向けて、現在の生活の中で、「傷ついた自己肯定感を回復する」、「コミュニケーション力やソーシャルスキルを身に付ける」、「人に上手にSOSを出せる」ようになること』としており、対象児の変容の多くが当てはまる。さらに、登校日数及び滞在時間の増加からも、この実践での支援がある一定の効果があることが示唆された。

5 今後の課題と研究の方向性

(1) 今後の課題

本実践で対象児の登校日数及び滞在時間が養護教諭不在時には著しく減少する様子があった。対象児が安心して会うことができる支援者が養護教諭1人であったことが、要因として考えられる。文部科学省(2022)は不登校支援に限らず、「学校全体でチームとしての指導・援助を行う体制の充実を図ることが肝要」としていることから、直接支援ができる教職員を複数確保するなど、支援体制の充実が今後の大きな課題と言える。

(2) 今後の研究の方向性

今回、養護教諭が関わり、支援計画の明確化、登校プログラムの実施、保護者および学級への支援を行うことが効果的であることが示唆された。一方で、学級への復帰といったところまで本研究において検証することができなかつたことから、保健室や別室登校後の学級への復帰や学習機会の確保への円滑な接続について、今後、具体的な手立てを明らかにしていく必要がある。また、対象児本人の意思を確認しながら、学習機会の確保及び中学校以降の本人の進路を見据えた支援を継続して行う必要があるだろう。

(3) 本人の卒業までの取組み

学校を休んだ期間は、学習に空白が見られる。対象児自身もそこに不安感を抱いており、中学校進学に向けて、学習を進めるところを頑張りたいと話している。本人の意向に沿いながら、学習計画を一緒に考え、中学校進学に向けた準備

を行う必要がある。また、保護者とも相談のうえ、中学校で1日を過ごすための心身の準備を第一の目標とした。

(4) 4月からの中学生としての動向や決意

対象児は、中学校で頑張りたいことや楽しみなことを「友人関係」「部活」「勉強」の順で、話している。対象児は「仲の良い友人を作って、楽しく中学校生活を送りたい」と話しており、本人なりに不登校を乗り越え前に進む決意が見られた。

6 謝辞

本研究を実施するにあたりご協力いただいた、対象児や保護者、B小学校の児童及び教職員をはじめとする多くの方々へ深く感謝申し上げます。

引用文献

- 河村茂雄(2007)「よりよい学校生活と友達づくりのためのアンケートhyper-QU」, 図書文化社.
- 熊谷圭二郎(2021)「養護教諭の不登校児童生徒に対する働きかけについて」, 千葉科学大学紀要第14号, 180-186.
- 三浦光哉(2014)『「本人参加型会議」で不登校は改善する! 教室復帰に向けた特別支援教育からのアプローチ』, 学研教育出版.
- 文部科学省(2022)『生徒指導提要』, 文部科学省.
- 文部科学省(2023a)「令和4年度 児童生徒の問題行動・不登校等生徒指導上の諸課題に関する調査結果について」, https://www.mext.go.jp/content/20231004-mxt_jidou01-100002753_1.pdf(最終閲覧日 2024年1月30日)
- 文部科学省(2023b)『養護教諭及び栄養教諭に求められる役割(職務の範囲)の明確化に向けて』.
- 曾山和彦(2023)『超多忙でも実践できる! スリンプル(スリム&シンプル)・プログラム— 週1回10分の「〇〇タイム」で「かかわりの力」を育てる』, ほんの森出版.
- 安福純子・中角正子・田中みのり・浅野寿子(2009)「不登校と保健室養護教諭の関わり」, 大阪教育大学紀要第IV部門教育科学58巻1号, 261-278.

Support for students, parents, and classes for school attendance involving Yogo Teacher: Through home visits, interviews, and SST interventions
Yumie KUDO